■シリーズ■

中学校武道

――授業の充実に向けて⑱⑦

――「今」の時代の武道授業を追い求めて――⑯

（生徒に剣道の楽しさを味わわせる授業の工夫）

涌谷町立涌谷中学校　教諭　庄子俊太

平成20年3月改訂の「中学校学習指導要領」に、第1・第2学年の保健体育で武道が必修になることが明記され、平成24年度から完全実施されました。

中学校武道が必修となり10年以上が経過した中で、「不易流行（ふえきりゅうこう）」の視点から、生徒に「剣道の楽しさ」を味わわせるためにはどのような工夫が必要かについて、これまで自分自身が行ってきた授業実践例や「令和5年度全国剣道指導者研修会」に参加させていただいた経験をもとに紹介いたします。

1　はじめに

私は本年度から、宮城県北部の遠田郡にある涌谷町立涌谷中学校に勤務しています。本年度は、まだ武道の授業を実施していないことから、前任校である同県の栗原市立若柳中学校で実践してきた剣道授業を紹介させていただきます。若柳中学校は私にとって初任校であり、3年間の在任期間でしたので、多くの実践ができたわけではありませんが、少しでも参考にしていただけたら幸いです。

栗原市若柳は宮城県最北部で岩手県に接しており、過去には全国中学校剣道大会で入賞するなど、剣道人口も多い地域だったと聞いています。現在は、剣道をしている小中学生が少なくなっていますが、今でも盛んに剣道が行われています。

平成19年に剣道を専門とする先生が同校に赴任されて以降、現在まで保健体育の武道では剣道が選択されています。若柳中学校では剣道の公開授業を行った年もあり、剣道具一式や竹刀が1クラス分はあります。当時の授業内容に

ついて、その先生にお話をお伺いしたところ、新聞紙切りやボール打ちなど剣道未経験の生徒でも楽しく取り組める内容を行った後、剣道具の着け方を学び、基本動作や基本技習得に向けて授業を組み立てられていたそうです。

礼法の確認（座礼）

2 これまでに実践してきた剣道授業

私が若柳中学校に勤務していた3年間は、新型コロナウイルス感染症の影響で多くの制限や感染症対策を講じながらの授業実践でした。感染症対策の観点から、剣道具を使用しない形での指導計画を作成し、その上で生徒に剣道の楽しさを味わわせるためには、どのような授業が効果的かについて、教材研究を行いました。

はじめに、武道は我が国固有の文化であるため、礼法を学ぶことは欠かせないと考えました。武道においては「礼に始まり礼に終わる」といわれるように、「礼法」を重視していること、「礼」を重んじ、その形式にしたがうことは、自分を律するとともに相手を尊重する態度を養うことにつながると考え、「礼法」の内容を単元の1時間目に行いました。併せて、日本刀の出現から第2次世界大戦の敗戦による剣道の抑制を経て、今日に至るまでの「剣道の歴史」についても1時間目に取り扱うようにしました。

若柳中学校には模擬刀が何本かあり、実際に生徒の手に取らせてみると、本物の刀のように大切に取り扱う様子が見られました。その意識を大切にした上で、実際に竹刀を持ちながら、構えや体さばきといった基本動作の習得に移りました。基本動作を意識しながら、新聞紙切りや切った新聞紙を丸めてボール打ち、バレーボールを用いたボール打ち、2人一組になっての竹刀打ちなどを実施しました。特に、バレーボール打ちは笑顔で楽しそうに取り組む生徒が多く見られて、振り返りの時間では、「剣道は大変なイメージが強かったけれど、ボール打ちをしたり、意外に楽しかった」と回答する生徒もいました。

3 指導主事学校訪問における研究授業

前任校では指導主事学校訪問において、第2学年を対象に専門である剣道の授業実践の機会をいただきました。事前アンケートでは、剣道が好きと答えた生徒が12%、どちらかといえば好きと答えた生徒が60%、どちらかといえば嫌いと答えた生徒が28%、嫌いと答えた生徒は0%でした。また、剣道が好きな理由として「かっこいい・楽しい」などが挙げられました。剣道が好きではない理由としては、「難しい・怖い」などが挙がり、剣道についてのイメージを聞いたところ、「難しそう」と回答した生徒が最も多く、「強そう・かっこいい」と肯定的な回答をした生徒もいました。

剣道の授業で身に付けたいことは、「技」が最も多く、次いで「礼儀」と答えた生徒が多くいました。これらのアンケート結果から、剣道に対して肯定的な印象を持ちながらも、難しそうといった苦手意識を持っている生徒や、恐怖心を感じている生徒がいることが分かったので、簡易的な学習から取り組むなど指導内容を工夫する必要があると考えました。剣道

ペアで竹刀打ち（正面打ち）

踏み込みを入れて正面打ち

３人組のグループになり正面打ちをしている姿をタブレットで撮影→自分たちの動きを確認

は、競技上の特性から、技能習得に日常的な運動動作が伴わないため、スモールステップで段階的な指導をすることが大切だと考えます。難しさや恐怖心を持っている生徒でも取り組みやすいように安全面に配慮した上で教材・教具を工夫し、仲間と協力しながら技の上達に向けた練習を行えるように授業を進めようと思いました。

また、ＩＣＴ機器（タブレット）を活用し、自分のイメージしている動きと実際の動きの違いを比較させて自らの動きを改善させたり、仲間へのアドバイスを行わせたりすることで、体を動かす楽しさや喜びを味わわせ、自らの学びを広げていけるような授業を展開したいと思いました。

本時の目標を、「気剣体が一致した正面打ちができる」と設定し、導入段階で明示しました。この授業のメインの活動はタブレットを活用し、学習カードのチェック項目を見ながら、自分の動きや仲間の動きを評価し修正させ、話し合い活動を活発に行うことで、本時の目標に迫りたいと考えました。タブレットの活用は、自分の動きを客観的に見る機会が少ないため、生徒の興味・関心を高められたと思います。

また、途中で教師の示範や解説を行うことで、見本の動きと自分の動きとの違いを話し合う生徒も多くいました。一方で、課題を見つけることもできました。指導主事の先生や同じグループの先生方からは、動画の撮影が一度きりで終わってしまったので、何度も撮影させる主体性を養う手立てが必要ということや、タブレットを活用することでの運動量の少なさ、そして、教師が実際に示範をすることも大事だが、「気・剣・体」を確認できる動画を、授業の展開中にプロジェクターで投影し、常に確認できるようにした方がよかったのではないかというご指導をいただきました。他に、タブレットを使うことが目的になってしまっていたのではないかというご指導もいただいたので、今後の授業改善に生かしていきたいと思いました。

指導主事学校訪問では、学習指

武道（剣道）　学習カード①　　年　　組　　番　氏名

単元目標	○技ができる楽しさや喜びを味わい，武道の特性や成り立ち，伝統的な考え方，技の名称や行い方，その運動に関連して高まる体力などを理解することができる。 ○相手の動きに応じた基本動作や基本となる技を用いて，打ったり受けたりするなど簡易な攻防をすることができる。

月日	本時の目標	内　容	今日の授業で学んだことや考えたこと，次回頑張りたいことを記入
／	剣道の特性を理解することができる	オリエンテーション，学習計画	
		剣道の歴史，礼法（座礼，立礼）	
／	基本動作を身に付けることができる①	バレーボール打ち，新聞紙切り	
		構えの確認，素振り	
／	基本動作を身に付けることができる②	構え，体さばき（足さばき，すり足，	
		送り足，歩み足），打ち方，受け方	
／	気剣体の一致について，理解することができる	気剣体とは？，残心	
		正面打ちをタブレットで撮影	
／	気剣体が一致した正面打ちができる	気剣体の一致	
		正面打ちをタブレットで撮影	
／	気剣体が一致した二段の技ができる	小手打ち，胴打ち，小手→面	
		タブレットで撮影	
／	これまでに習得した技を発表することができる	面，小手，胴，小手→面を発表	
		タブレットで撮影	
／			
／			

自己評価	・剣道の授業で，礼法の仕方を理解し，身に付けることができた。　【　A　・　B　・　C　・　D　】 ・仲間と協力しながら，タブレットで撮影をしたり，お互いの課題の解決に向けて，積極的に話し合いに参加できた。 【　A　・　B　・　C　・　D　】 ・剣道の基本動作（構え，体さばき，打突の仕方・受け方）を習得することができた。【　A　・　B　・　C　・　D　】 ・基本となる技（面・小手・胴・二段の技）を習得することができた。【　A　・　B　・　C　・　D　】 ・用具を取り扱い方を理解し，安全に授業に臨むことができた。　【　A　・　B　・　C　・　D　】

剣道で一本になる条件とは？

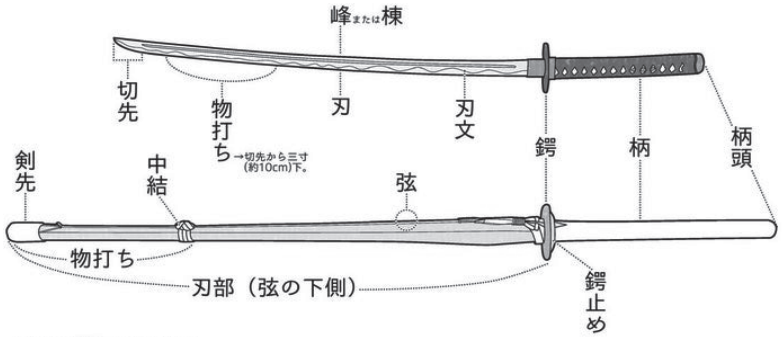
→充実した気勢，適正な姿勢をもって，竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し，残心あるものとする。

“気”
“剣”
“体”
の一致

充実した気勢・・・声の大きさ
刃筋正しく打突・・・刃部（弦の反対側）で打突する
適正な姿勢・・・姿勢を崩さず打突する

“残心”・・・技を出した後も相手からの反撃に備えて身構えること

＊竹刀と刀のなまえ



※竹刀の「物打ち」について
物打ちは、「剣先から中結までの間の刃部」もしくは「剣先から中結までの刃部」と説明されることが多い。
全日本剣道連盟『試合・審判規則第13条「竹刀の打突部」』には、「竹刀の打突部は、物打ちを中心とした刃部（弦の反対側）とする」とある。

導案作成の段階から多くの先生方にアドバイスをいただきました。特に、保健体育科以外の先生や剣道が専門ではない先生方からいただいた助言は、剣道未経験者の視点からのもので、貴重な機会になりました。

4 「令和5年度全国剣道指導者研修会」に参加して

令和5年10月13～15日に行われた、「全国剣道指導者研修会」に参加させていただきました。1日目の、新型コロナウイルス感染症拡大防止に留意した中学校における剣道授業の講義では、生徒が安全・安心に学習できる環境を整備する大切さや感染症対策を行った上での効果的な授業の例示を学び、判定試合等の生徒が楽しさを味わいながら取り組める授業を紹介していただきました。また、中学校保健体育における剣道学習の考え方の講義をいただき、ＩＣＴ（情報通信技術）は、学習の目標を達成するためのツールであって、使用することが目的にならないように留意することが大切だと再確認できました。

2日目は、主に実技のご指導をいただきました。午前中は、導入で取り入れられる「ジャンケンゲーム」や「手拭いゲーム」、「パートナーを探せ」、「新聞切り」、「新聞球打ち」などの運動を受講者全員で楽しく取り組みました。その後、剣道に必要な動きづくりや剣道具を使う授業例と、使わない授業例を学びました。特に1日目の講義でもお話をいただいた判定試合については、習熟度別のグループを組むことが望ましく、個別最適な学びにつながると思いました。2日目の最後には、主体的・対話的で深い学びについての研究協議を行いました。全国の参加者の方々から実践事例を紹介していただきながら、話し合い活動を行うことで、多くの学びがありました。

3日目は、剣道における安全指導や体罰・暴言によらない指導の講義をいただき、生徒が楽しく授業に臨むためにも、遵守（じゅんしゅ）すべきことについて再確認できました。3日間の研修会を通して、経験豊かな全国の講師の方々から多くのご指導をいただけたことは、今後の教員生活において貴重な財産になりました。

5 最後に

全国剣道指導者研修会の藤田弘美先生の講義の中で、教員の剣道授業に対しての否定的な回答の主な理由として、基本となる技の「授業時間数の問題」が増加したという話がありました。剣道授業の平均配当時間は8時間程度となっていて、その授業時数で基本となる技を習得させることは難しいと考えられ、授業構成も頭を悩ます問題だと思います。この点は、長年の課題だと思いますが、剣道未経験の先生の積極的な研修会への参加や剣道経験者の先生からの伝達講習等が必須になってくるのではないかと思います。

「不易流行」という言葉があるとおり、剣道の授業においても、従来から続いてきた教材教具は生かしながらも、タブレットの活用などといった新しいものを必要に応じて取り入れていくことが、生徒が「剣道の楽しさ」を味わうことにつながるのではないかと思います。私自身、保健体育教員としてまだまだ未熟ですので、現状に満足することなく、多くの先生方からのご指導をいただきながら、教材研究に努めていきたいと思います。今回は、このような機会をいただきまして、ありがとうございました。

全国武道指導者研修会の最新情報は QR コードからご覧ください